



Title	『アダム』
Author(s)	サント, プラカーシュ ナーラーヤン; 高橋, 明
Citation	印度民俗研究. 2019, 18, p. 3-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72055
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『アダム』

プラカーシュ・ナーラーヤン・サント著

高橋 明 訳

『アダム』

パースカー・バールデースカルから借りた本の中のアダムという男の話を読んで、ぼくの頭の中にいろいろな考えが浮かんできた。神様が土から人間を創造したとその本には書いてあった。そんなことができるのだろうか。頭の中にぐるぐるとイメージの輪が回りはじめた。そのときの光景が目の前に浮かんでくるようだった

・・・神様は自分が創ったエデンの園を歩いていた。緑の森があった。樹には鶯がからまっている。地面にもあちこちに花が咲いている。樹々には色とりどりの実がここにもあそこにも。鶯にも花、草には穂。空にはさえさえずる鳥の歌声が飛びかっていた。耳障りな音や嫌な音は少しも聞こえない。

歩いているうちに神様は大きな池の縁に出た。静かな波が神様のつま先に触れた。水面に広がる蓮の茎にはお盆のような丸い葉、葉の上には蓮の花。神様はそれらすべてをごらんになった。足元の土は柔らかい。花卉を踏んでいるようだ。神様は目を下にやった。水を含んで赤く美しい、まるでバターのように柔らかい土があった。神様の御足を傷つけることのないよう土はそこに広がっていた。神様は一掴みの土を手を取った。掌にのせて転がすと土はきれいな丸い球になった。神様は立っておられた。池の面に姿が映っていた。その姿を見ながら神様は手の中の土塊から一つの像を造られた。ああ、それは何と美しかったことか。おまけに今にもしゃべりだし、歩きだしそうだ。神様はその像にふっと息を吹きかけた。すると奇跡が起こりその土塊に命が宿ったのだ。それこそこの世界の最初の男、アダム。神様の御姿にそっくりの・・・。

男はエデンの園で一人で暮らした。一人きりで。

エデンの園とはどんなところなのだろう。樹や鶯にはどんな花が咲くのだろう。エデンの園ではどんな匂いがするのだろう。

神様が自らお創りになったエデンの園に住んでいたアダムとはどんな男だったのか。その声は。話をしていたとすれば誰と。神様とだろうか。

エデンの園で一人で暮らすことに、やがてアダムは倦むようになって

きた。神様はアダムのあばら骨からもう一人の像を造られた。その像に命を吹き込むとイヴが生まれた。それから何が始まったのだろう。

アダムこそが最初の男だったのか。

今どこにでもいる大人の男たち、学校に行っているぼくのような子供、それよりもまだ小さいピッティーのような男の子、彼らすべての男たちのアダムはご先祖様なのか。それまで誰もいなかったのに、その後いきなりこんなにたくさん男たち。この大勢の一番最初にアダムがいたのだろうか。

アダムがどんな男だったのか、考えてみてもぼくはまったくわからなかった。考えに考えていると鼻がむずがゆくなってきた。祖父にたずねてみると祖父は言下に答えた。それは嘘だ。神様は誰も造ったりしなかった。みんな自然に生まれたのだ。それから祖父はとてつもなく長い鎖の話をした。一つ一つの生き物の、人間とそっくりな生き物の一つの輪とそのまた次の輪がつながったまた別の鎖。次から次へと続く鎖の輪から輪……。祖父の話はいつもそうだ。凧の糸はいつだってもつれる。もつれをほどこいているうちにうんざりしてくる。子供たちの凧糸が一緒にもつれてカボチャみたいに大きくなったらどうなる。まったくそのとおりに、頭がおかしくなるような長い長い鎖の話を聞いていると、頭の中がぐちゃぐちゃになった。祖父には何を聞いても「それがどうした。何でもないことじゃ」と言って、わかりきったことにしてすませしてしまう。ぼくは混乱してしまって、自分の頭が頭ではなくって、まるでもつれた糸の丸い塊になったような気がしてきた。

ぼくは祖母にそのことを話してみた。祖母は言った。

「ほんとうだね。頭のいい人の話はいつもそうだよ。そういう人の返事はそもそもそういう返事の向こうにあるんだよ」どういう意味かと考える前に祖母は言った。「今日は黒砂糖のポーリーを作らなくちゃ。あたしの頭の中にはその鎖しかないんだよ。だから今日のところはじゃましないでくれ。外で遊んでおいで。勉強はひかえめにね。頼むからよけいなことであたしの頭までごちゃごちゃにしないでくれ……」それ以上聞かずにぼくは部屋を出ると外のベランダに腰をおろした。

祖父の家の土壁にもたれかかっているとすっかりいい気持ちになってきた。不思議な気持ち。

教会への道を通る人がいる。ゆっくりとまったく急ぐ様子もなく歩く人がいる。お話の中のあのカメラのように。大急ぎで歩く人もいる。目が覚めた後のあのウサギのように。自転車に乗った人はまるで「モンスーン特急」を漕いでいるようだ。音だけはモンスーン並みだが、自転車は死んだようにのろのろと進んでいる。薄く目を閉じて道を見ていると、わが家と通りを挟んで向かいの家並みがまるで走っているように左右に揺れている気がしてくる。人が左から右へと歩いていくと家が右から左へ通り過ぎて行く。家までが舞台の上で芝居をしているようだ。芝居をさせているのは誰だろう。精霊か羅刹が舞台を絶えず右や左に動かしている、そう思えてくる。楽しくなってきた。

舞台を手につかんでしゃがんでいる精霊が、すぐ側にいて今にも立ち上がりそうだと思ったそのとき、玄関が開いて誰かが入ってきた。それは精霊ではなく顔見知りの郵便配達人だった。

「ランプー坊、どうしたんだい。唇をとんがらせて、お勉強するのはやめたのかい。朝から怠けるんじゃないよ、勉強しなきゃだめだよ、勉強、勉強」

手紙の束を手渡すと配達人は出て行った。

ぼくはすぐに手紙を祖父の机の上に置くと、また戻ってきてベランダに腰をおろした。舞台の芝居はもう終わっていた。目を細めてもだめだった。精霊も消えていた。人間だけが相変わらず行ったり来たりしていた。他にすることがないかのように。他人の家の前を通り過ぎるだけ、こっちからあっちへ、あっちからこっちへ。この行ったり来たりの中で、いつまでも続く長雨のような匂いがした。だれかがぼくの頭に手を置いた。はっとした。さっきの精霊がやってきたのか、と思った。それは祖父だった。祖父の手には大きな包みがあった。それをぼくの前に置いた。ぼくが包みを手に取ると祖父は家の中にはいった。

包みにはぼくの名前が書いてあった。青インクのきれいな大きい文字、母の手紙だ。うれしくてとびあがると祖母に手紙が来たよと伝えてきた。

それからペランダにすわって、祖父がするようにゆっくりと包みを開いた。中には手紙が三通あった。妹のマニーの手紙、母の手紙、それから父の手紙。手紙にはどれも特徴があった。マニーの手紙はまあたらしい書いたばかりの大きさもまちまちでぎこちない文字。母の手紙はぼくのために大きく書いてくれたきれいな文字。父の手紙の黒インクの文字は、いつものように小さくて少し傾いている。

マニーの手紙は半分が青インク、残りの半分が黒インクだった。手紙の最後には青インクの大きな染みが。マニーの手紙はいつも二通あるのだ。一つはマニーが文字で書いた手紙。それは誰でも読める。もう一通は文字で書かれていない手紙。それはぼくにしか読めない。魔法の鏡の中にこめられたすべての秘密が王子様には見えるように、マニーの手紙を読むとそこに書かれてはいないもう一通の手紙がぼくには読める。つまり目の前に浮かんでくるのだ。

マニーは母に言って手紙を書くのに新しい紙をもらう。それから家の中にあるだけのペンを探してみた挙げ句、母にねだって母のペンを使わせてもらう。あちこちにすわってみて最後に落ち着く場所を見つけてそこで手紙を書きはじめる。「親愛なるお兄様へ」ここまで大きな文字で書くと、台所に行って母に「今日はなんにち、お母さん」とたずねる。それから手紙に日付を書く。住所を書こうとすると母から借りたペンの先がゆがんでいることをマニーの目は見逃さない。それからペン先の修繕。やっとなんとかペスが直る。次にみんなに「ご機嫌いかがでしょうか」そこでまた「お母さん、それから何を書けばいいの」とたずねながら台所へ。母は言う、

「ねえマニー、お母さんはいそがしいの。そんなになにもかもできないのよ。お父さんがお部屋にいらっしゃるでしょう。あなたも知ってるでしょう、お父さんは手紙を書くのがとっても上手でしょう。毎日お手紙を書いてるところを見てるじゃないの」

「わかった、わたしお父さんに教えてもらう」マニーは答える。それから台所を出て父の部屋に。

自分の目の前に積んである本の陰に部屋というものがあって、その部屋の中でマニーという名前の少女が自分のことを「お父さん」と呼んでいる

ことに父が気がつく前に、母はすぐに言う。「いいわ、いいわ。マニー、お母さんが教えてあげます」

しかしマニーはマニーだ。一度頭の中に浮かんだことは消しようがない。まったく母にそっくりだ。マニーは父にまわりついて手紙の文句を教してもらおう。書いているうちに母のペンがつぶれて便箋に大きな染みが落ちる。父の大事な黒インクのついたペンを使わせてもらおう。父が教えてくれるのを「お父さんたら、もう、早口なんだから」そう言って書くのをやめる。最後にお母さんに教えてもらった文句を手紙のおしまいに書く。

これがマニーの手紙と一緒に届く、文字では書かれていないもう一通の手紙。

マニーの手紙の最後の挨拶はいつも決まっていた。

「海をインクに樹をペンにしても、とてもとても・・・」

その決まり文句がぼくはとても好きだった。ぼくもマニーくらいのときには祖母に手紙を出すときはそう書いていた。海や樹がまるで自分の友だちのように。

青い海の水が目の前で上下に揺れている。万年筆のようになめらかで色あざやかなペンの樹が岸辺に生えている。その中の一本の樹が青い空の便箋に青色の文字を浮かび上がらせていく。

ぼくはあるときマニーの返事にこう書いた。「お手紙どうもありがとう。樹のペンで書いた手紙を両目をお日様のようにして読みました」

マニーからすぐに返事がきた。

「両目がお日様になったら、お兄様の形の良いお鼻がやけどをします」こんな文句は父がマニーに教えたにちがいない。マニーはもちろん、母にだってそんなことは思いつかない。言うはずがない。ぼくが鼻をやけどするなんて考えただけで母は泣くだろうから。

形の良いお鼻だって。そんな言い方ができるのは父だけだ。

マニーの手紙のはじめに皆さんへのご挨拶。ぼくが小さいときはこの挨拶をするのが一番上手だった。ぼくがその頃に書いた手紙を母に見せてもらったことがある。手紙の書き出しはこうだった。「マニーにぼくからの

ご挨拶。^{モーティ}真珠にぼくからのご挨拶・・・」

マニーからは挨拶の後に、学校の階段から落ちたのは誰か、道を歩いていて誰がどんなふうに転んだかについての知らせ。それから、昨日学校でお弁当に何を持っていったかについての大事な知らせ。続いて友達の誰かが町に行ったことについて、その町の名前が「モンベイ」(ボンベイの誤り一訳注)ということ。最後に「今日はここまでにします」その下に自分の名前、ヤーミニー。

マニーの本当の名前はヤーミニーなのだ。ヤーミニーつまり夜のこと、そう母は教えてくれた。それは月の光が煌々と照らす昼間のように明るい夜なのだろうきっと。

これがマニーの手紙だった。

母の手紙を読んでいるとすぐ側に母がすわっているような気がしてくる。母のふっくらとした手がぼくの髪の毛や背中をなでている。そんな気がする。町で家族みんながどう過ごしているか、ぼくの友だちが何をしているか、どんな映画を観たか、料理は何を作ったかといったいろいろなこと。ビティヤーが何をしているかについての話。ビティヤーはもうドアや壁をつたって自分で歩きはじめたこと。ぼくにそっくりになってきたこと。賢いことも。ぼくのことを思いだすこと・・・といったようなこと。母の目には涙が。最後に、ぼくがしなければならぬことと、してはいけないことについてこまごまと。手紙を終えるその前に「立派な学者のおじいさまと優しいおばあさまと一緒に暮らせるお前はほんとうに・・・」その後にもなにやかやとずいぶん書いてあるのだが、学校の勉強と同じでそれはぼくの頭からすっかり消えてしまう。

マニーは手近にある紙なら何でも便箋に使う。母の手紙はぼくの古いノートから切り取っておいた白いページに書かれている。その中の一枚にはぼくが小さい頃に描いた角をはやした人間の絵が描かれていたこともあった。

父の手紙はそれとはまったく違っている。いつも決まった同じ便箋。インクは黒。少し片方に傾いた文字が一直線上に整然と並んでいる。

父はなんについてもそういうふうだった。

父の部屋は部屋そのもの。すべてが決まった場所にある。

窓のカーテンは空色。ベッドの敷布には皺一つない。机の上は本、本、本。あらゆる物が整然と置かれている。部屋中に匂いがたちこめている。新刊書の匂い。古本の匂い。瓶にはいった香水の匂い。タバコの箱の匂いに、その他の匂い。ぼくはその全部が好きだ。匂いは思い出と一緒になっている。そのすべての中に父の思い出の匂い。父の部屋の匂い。

父の手紙を封筒から取り出すとその匂いをふんわりと感じた。ぼくは手紙を読みはじめた。最初にぼくからの手紙を読んで思ったこと、それが書いてあった。それからマニーとビティヤーが最近どうしているかについて。それはとても不思議な書き方だった。「ビティヤーは両手で壁をつたい歩きしながら何かないと家中を探し回っています。何も見つからないと癩癩を起こして泣きだします」

「マニーの友達のスィーマーが名前の通りに町の境界^{スィーマー}を越えてムンバイに行きました。ラーニーバーグを見ておまえのためのお土産に“ちっちゃいライオンさんの可愛い赤ちゃん”を買ってくるそうです。ただし、このことをおまえは決して誰にも言うてはいけません。もし誰かに言うとしても言った相手は、また他の誰にも言うてはいけません。さらに、もしその子が誰かに言ったとしても・・・」

父の手紙はいかにも手紙らしい手紙だ。

父の手紙の文句はともかくとして、その紙の匂いは父の思い出をいつもどこかでぼくに届けてくれた。

ぼくが小さいとき、父の友人たちのことはまったく知らなかった。本当を言えば友人というものがどういうものなのかもぼくは知らなかった。誰かが父に会いに来ると、ただ誰かが来たというそれだけのことだった。

祖母の家に来てから、だんだんとぼくのところに遊ぶために、本を借りるために、それから自分の本を持って、ワーマニヤー・デーシュパンデー、サンピヤー、カンバルギー・ガンギヤー、カルギヤーたちがやって来るようになった。その中にはいっぱい話をしたくなったり、自分の持っている

ものを何でもやってしまいたくなったり、いつまでも帰らないでもらいたくなる相手がいた。そういう連中がつまり自分にとっての友だちなのだと、はたと理解した。ぼくは自分がすっかり大人になった気がしたものだ。

そうこうしているうちに、ぼくは休暇で両親の元に帰省した。そのときぼくは両親のことを改めて観察した。ぼくの頭の中にくっきりとあざやかな姿が浮かび上がってきた。父に会いにやってくる誰かというのが、みんな父の友人なのだとということがわかった。その友人たちがまたそろいもそろってみな父以上の変人だった。それもとっておきの。母はいつも父に言っていた。「こんな変な人ばかりわざわざどうやって見つけたんですか」

母がこう言うとき父も笑わなかったし、母も笑っていなかった。二人とも静かだった。今でもぼくは母の言葉の意味がよくわからない。それを聞かされているときに父がだまっていることから、そこにはある意味が隠されていること、いつものように笑わないからにはその言葉には小さなとげがあるのだということだけはまちがいなかった。

最初は父の友人たちすべては同じ首飾りの一つ一つの宝石の^{たま}珠のように感じた。それからその珠がそれぞれいかに異なっているかがわかってきた。母はそのうちの大抵の人を許していた。しかし、中にはやってくる母の顔から笑いが消え、額から鼻にかけて一本の深い皺が刻まれるような人もいた。

中でも母が一番毛嫌いしていた人物が一人いた。いつもパジャーマー、シャツ、ジャケットに焦げ茶色の帽子。ところがその帽子が頭に落ち着いていたためしがないのだった。帽子をぬぐと彼は手当たり次第どこにでも置いた。置いたかと思うとまたあつという間に自分の頭にかぶった。帽子をぬいではかぶり、かぶってはぬぐ。父の友人たちは彼のことを「ボウシカル」と呼んでいた。(カルは出身地名の後について、マハーラーシュトラ人の苗字の一部となる語。また別して「手」という意味もある—訳注) ぼくはそれがその人の本名だと思っていたほどだ。しかし、あるとき父は別の友人にこう言っていた。「ボウシとカルとの間には特別な関係があるわけだ」ぼくは途中でわりこんで聞いた。「どういうこと」父は言った。「ボウシあるところに常にカルあり。カルというのはここでは手という意味だよ。つまり帽子

と手がいつも一緒にある。だからボウシカルさんというわけさ」

そう父が話しているちょうどそのとき、かのボウシカルさんの姿が戸口に現れた。来たとたんには彼は帽子をぬいで手に取った。それからサンダルをぬいだ。帽子をかぶった。部屋に入ってきた。帽子をまたぬいで手につかんだ。椅子に腰をおろした。帽子はテーブルの上に。手で頭をなでた。帽子を頭にかぶった。例のぬいだりかぶったりの繰り返し。ぼくはそのぬいだりかぶったりの回数を数えはじめた。その数が31回を越えたときにこらえきれずに笑いだしてしまった。

父の他の友人たちは大声で話し、議論を交わし、詩を聞かせていた。本やノートのページをしきりにめくっては読み聞かせていた。かと思うといきなりどっと笑いだしたりした。そんなやりとりが賑やかに続いていた。昼日中に大声で騒いでいた。家のドアや窓ガラスが割れるのではないかと思うほどだった。母にはこれが気に入らないのだろうなとぼくは思った。

あるとき母は父に言った。

「何て騒ぎようですか。隣のパントウ・クルカルニーさんやサーヴァルデーカルさんがそのうちきつと文句を言いに来ますよ。ぜったいに」

「そうかい」父はただそう言うのと部屋を出た。外の騒ぎはますますひどくなっていった。母の心配も。母がお茶をいれるのに客の人数を数えるためにぼくは外へ行った。ベランダには13人の客がいた。そのうちの一人が特に大声でしゃべり笑っていた。椅子に片足を乗せていた。その男の方を見るとそれが隣家のパントウ・クルカルニーさんだった。その隣にすわっていたのはサーヴァルデーカルさんだった。

中に戻ってそのことをぼくは母に伝えた。母は言った。

「お母さんの最後の頼みの綱が切れたわね」

ぼくにはその意味がよくわからなかった。

さて父の友人たちのこんな騒ぎが続いている間、あのボウシカルさんは左の膝に右足を乗せて目を閉じて何も言わずに座っていた。彼もときにうるさくすることはあったが、それは一風変わったやりかただった。とつぜん目が覚めたかのようにそれまで静かに膝に乗せていた片方の足を大きく揺らしはじめる。ときどき足に左手をばしっと打ちつける。それから思い

切りながいおくびをつく。すると父が言った、

「不機嫌になるというのは批評家の身についた一番の習性だな。ただし、おくびというのは満足しているからじゃないのはまちがいないとしても、作品というよりは消化の問題じゃないか」

父の友人たちは大笑いした。ボウシカルさんはつかんだ帽子をいじりながら何も言わなかった。

実際ボウシカルさんがうるさくしない限りは、母にも嫌いになる理由はないはずだった。しかし彼を嫌う理由が母には二つあった。

一つは、ボウシカルさんがいきなり家の中に入ってくることだった。水が欲しいときにはまっすぐ台所に押し入ってくる。「お茶をください」とベランダに入り込む。そして母が外出していないようなときには、自分で勝手にお茶をいれるのだ。紅茶の葉、砂糖、水、牛乳を鍋にいっしょくたに放り込むと火にかけるのだった。ぼくはこの目でそれを見たことがある。

「わたしのお鍋から臭いが取れるのに一月はかかります」母の愚痴がはじまる。「おまけにあの汚い帽子をどこに置くものか、わかったものじゃありません」

ボウシカルさんが気に入らないもう一つの理由は、その「目付き」にあった。いつも半眼にして人を見つめる癖があった。ぼくもあまりいい気持ちはしなかった。ぼくの背の高さを測っているかのような目付きでじっとぼくのことを見た。母やぼくがそのことで父に苦情を言うと、父は笑って言った。

「だってあの人は批評家だからね。彼にとっては探るような目は大事なんだよ。どこに何があるべきで、何があるべきでないかをじっと見るといのが・・・」

「だったらあっては困るものはみんな自分で引き受けて、あって欲しいものはみんな他人に任せればいいですよ。自分の帽子と同じに、みんなの帽子までぬいだりかぶったりして。とんでもない話ですよ」

母もときにはまちがったことを言う。ボウシカルさんが他人の帽子を取ってかぶったりぬいだりするところをぼくは見たことがなかった。そのことを指摘すると母は言った。

「あなただけです、そんなことをするのは」

父の友人で母が嫌っている人がもう一人いた。その名前がなんだったかぼくは知らない。みんなその人のことを「詩人」と言っていた。ときには「大詩人」とか「桂冠詩人」とも言っていた。彼はまたとびきりの変人だった。毎日違う服装。ドータルだったり、パジャーマー、と思うとズボンだったりした。パンジャーブ風ズボンのときもあった。ただし髪の毛だけはいつも枯れ草のようにボサボサ。口元でいつもなにかブツブツつぶやいている。彼にも家いきなり入り込んでくる癖があった。やってくるとまっすぐに台所に来たかと思うと母に向かって自作の詩を聞かせるのだ。それもいつ終わるともつかず。母はそれが嫌だった。最後に詩人はたずねた。

「どうです、素晴らしい詩でしょう」

「ええと言えはまた詩を聞かされるし、いいえと言えはあの人怒るでしょう。なんて返事をすれば良いのかほんとうに困ります」後で母はよくこう言っていた。「何を言ってるのだからわたしには全然わかりませんもの」

母は陰では彼のことを「アーガーウーさん（前から来る、あるいは無作法な人、さらにはさあ歌いましょうの意味にもとれる表現—訳注）」と呼んでいた。両親が話すときなどにはアーガーウーさんが来ましたよ、とそう言っていた。

ある日父の友人たちがいつものように家に来て、その内の一人が何かを大きな声で朗読していた。ぼくは窓の側に立って家の裏手にある家並の屋根瓦を見ていた。そのとき詩人がドアを開けて入ってきた。そのまま足を止めてポケットを探っていたかと思うとまたついと外に出ていった。タバコを買いに行ったのだろう。

ぼくは叫んだ。「お父さん」

朗読していた人は読むのを止めた。みんながぼくの方を見た。

「詩人のアーガーウーさんが裏口から来たよ」ぼくは言った。

「アーガーウーが裏から来たって。いやなんと。素晴らしい。詩人のアーガーウー、さあ、歌え、だからアー、ガーウー、これはまたすごい。アーガーウーとは詩人の持ち前の性格で、“さあ、歌おう”とはこれは彼の・・・」アコールカルという名前の父の友人の一人が窓の側に来て言った。彼はぼ

くの背中をポンと叩いた。何人かはぼくのことを誉めた。その内の一人がぼくを高く抱き上げた。

アコルカルさんが叫んだ。「みんな静粛に、静粛に。一つ詩がひらめいた」

みんなそれぞれの席に戻った。

しばらくして詩人が戻ってきた。彼のために空けておいた椅子にすわった。詩人がタバコに火をつけた。

アコルカルさんが膝を叩いて詩人の前に腰をおろした。彼は言った。

「われらの大詩人の前でぼくは自分の頭にひらめいた詩をお聞かせしようと思う。聞いてくれ」

全員が拍手をすると彼は言った。「一段ごとに最後の一行をみんな声を合わせて歌ってくれたまえ。この詩をランパン、かのユーモア精神に富んだ少年に捧げる。では、

詩人のアーガーウー
来た来た来たぞ、さあ逃げろ

笑いが弾けた。全員がその一節を 4,5 回声を揃えて歌った。ぼくも歌った。

次から次へと歌い出す
口からでまかせ歌い出す
聞き手はたまらん
ほらみろ始めた
詩人が来たぞ、さあ逃げろ

みんなが声を合わせて歌い笑っていた。当の詩人のアーガーウーさんときたら笑いすぎて椅子から転げ落ちんばかりになっていた。それくらいみんな笑いに笑った。二人ばかりは床に倒れ込んで笑っていた。笑いながら彼らはアコルカルさんの足にすがりつくようにしていた。

アコルカルさんが少した詩を歌うと、詩人のアーガーウーさんが椅子から立ち上がってアコルカルさんの足元にひれ伏した。アーガーウーさんが歌った。

もうこれ以上はやめてくれ

伏してお願いいたします

それまでまったく笑わないでいたアコールカルさんも体を折り曲げて吹き出してしまった。

そうこうしている内に、わが家の使用人のゴーヴィンダーが肩に洗濯物を担いでバケツと物干し竿をぶら下げていきなり部屋に入ってきた。彼は戸口で立ち止まった。この騒ぎに度肝を抜かれたのだ。彼はあんぐりと口をあけていた。それを見てぼくは浮かれたように叫んだ。

詩人のアーガーウー

でたでたでたぞ、お化けがでたぞ

この一節をまた全員が5,6度は歌っただろう。

その内に母が部屋に入ってきてぼくをそこから引っ張り出した。

「頭がおかしいんじゃないの。こんなことじゃ先がおもいやられるわ。外に遊びに行きなさい。広いところで。お父さんに似てるんだわ、この子は」などなど。母になんと言えれば良いのかわからなかった。ただ母も楽しんでいることだけはわかった。

これが母が嫌っていた父の二人の友人であった。

父のその他の友人たちで母が腹を立てなかったという人についても、顔をあわせないでいる方がよりました。それがベスト。

前にも言ったようにぼくらの父こそがその風変わりな友人たちの中でも一番風変わりな人だった。

手紙の中で父はいろいろな友人のことをあれこれと書いていた。それを読んでみるとその友人たちが祖父の家に本当にやってきたかのように思えた。全員がそのままに。

父のすることは何もかもほんとうに人とは違って、まるきり。まず父は読書家だった。これが第一。あちらこちら歩いてまわるのが好きだった、あてもなく。これが第二。そして机に座って書き物をする。これが第三。本を読んだり書き物を始めると父はどこかに消えたようになる。母のことさえ忘れたようになった。友だちがくると、また大声でしゃべって議論をして笑う。詩を聞かせる、などなど。父のことがますますわからなくなる。がらりとかわるのだ。子供の遊びについてもそうだった。

あるとき父が祖父の家に来ていたときのこと。ぼくはパルリヤーやカンビヤーと独樂をまわして遊んでいた。ぼくとパルリヤーの独樂は木製の独樂だった。ムクロジの木で作ったあざやかな色つきの独樂。カンビヤーの独樂はスイギュウの角製だった。スイギュウの角で作った独樂はガタガタ揺れながらまわっていきなりゴロリと倒れるのだった。ぼくらはその独樂にガタゴマという名前をつけていた。ぼくらが庭で独樂をまわしていると大きな本を手にした父がやってきてベランダに腰をおろした。

ぼくが投げた独樂が父の足元にまで転がって行った。走って行って独樂を拾い上げた。ぼくは右手に独樂をまわす紐をつかんでいた。

父はその様子をはじめからじっと見ていた。

「ほら、これが独樂。本とはちがってこれはまわすものなの。この紐で」手の紐を持ち上げて見せながらぼくは言った。

「独樂か」父は言った。

独樂よ
まわれまわれくるくと
ほらほらごらん
休まず休まず
いつまでも
まわりつづける
くるくるくる

「だろう」と父。

ぼくはうなずいた。

とがった芯を
地面にぐいと突き立てて
立ったよ立ったよ

父の詩がはじまった。子供が独樂をまわして夢中になるように父は詩を歌って我を忘れていた。ぼくは父自身が夢中になってまわっている独樂になったような気がした。その父の独樂はぼくらの独樂のように派手な色をしていない。空に浮かぶかすかにしか見えない淡色の独樂だ。ガタガタまわるガタゴマではない、くるくるといつまでも静かにまわりつづける独樂

だった。

詩を歌い終わると父は言った。

「独楽というのはこれだね。ちょっと見せてごらん。これが独楽でこれがまわす紐だね」

ぼくはうなずくと父の手に独楽を渡した。紐をよく拭ってきれいにするとそれも父に渡した。

「最初に独楽を左手にしっかりとぎって、紐をきつく巻きつけて」
ぼくが独楽のまわし方を父に教えていると、紐を巻き終えた父がいきなり独楽を地面に投げつけた。あっと思うまもなく独楽が視界から消えて、独楽が地面に当たる音も聞こえなかった。ぼくがあちこちキョロキョロと見まわしているとパルリヤーが叫んだ。

「うわあ、ほらそこそこ」

父の右の掌の上にその独楽がまるで根を生やしたようにどんと立っていた。

父の手の上でまわりつづける独楽の姿は美しかった。まるで独楽の上に独楽が乗っているかのように。

それからまた一度父が祖父の家に来たのは、土地の子供たちの揚げる凧が空一面に浮かんでいる祭りの頃だった。赤い凧、黄色い凧、緑のかっこいい凧、長い尻尾のある凧。凧はまた貧しい人間たちのようでもあった。新聞紙で作ったみすぼらしい凧もあった。物乞いをしてまわる乞食のような。

ぼくも凧を一生懸命作った。できあがりはベスト。空に揚げれば一気にそのままインドラ神の宮殿にまで届くような凧だ。カンバルギー・ガンギヤーがつかんでいた凧を放すと、ぼくは凧糸を引いた。だが凧は空に舞い上がらなかった。糸を引っ張ると凧は頭を下げてそのまま地面に落ちてきた。ぼくらは役割を替えて凧を揚げようががんばった。しかし凧はどうやっても頭を地面にぶつけるばかりだった。最後に凧に長い尻尾をつけて思い切り糸を引っ張った。すると哀れな雌牛めうしのようにへろへろと凧は頭を上げてどうにかこうにか空に昇りはじめた。そんなのは少しも面白くない。

ぼくらは互いに喧嘩をはじめた。ついには凧ではなく、自分たちが地面に落ちたようになった。凧も落ちてきた。それよりもぼくらの方がはるかに下におっこちたようになった。

父はベランダに立って一部始終を見ていた。父はぼくを呼んだ。

「今日は新式の凧を一つ作ってみようじゃないか。さあ、元気を出して笑いなさい」ぼくは笑うどころではなかった。

昼ご飯をすませて父は凧作りにとりかかった。ぼくの凧作りは紙よりも糊をたくさん使った。乾きのよい、塗ってもはみでてこないような糊はどこにもなかった。「糊をつけたがみんなこぼれ出た」という代物ばかりだった。

しかし父の凧作りはあっという間に終わった。真っ赤な凧。中央部は薄いアーモンド色。四方に糸をピンと張って、真下にまっ黄色の尻尾がついた逆三角形の凧だった。

「さあ、おまじないを唱えてお守りを結ぼう」父は言った。

目をつぶって父は何かをぶつぶつと呟いた。ぼくがそれをちゃんと見ていられるか確かめるために父は途中で目を開けてちらりとこっちを見た。

昼からバーブローオをやって父はガラスの粉末入りの糊をまぶした凧糸を巻いた太い糸巻を買ってこさせていた。

夕方ぼくと父はその凧を揚げた。

ぼくは凧を頭上に高く掲げて手を離した。父が糸を引いた。その凧は吹き上がる噴水の水のように一直線に空に昇った。ヒュンヒュンと凧を切る大きな音が聞こえた。糸をゆるめるとくるくると回転して降り始める。糸を引くとまっすぐ上る。ゆるめたり引いたり、またゆるめたり。凧はゆっくりと上へ上へと昇って行って、ついにラクシュミーの木よりも高く昇るとぼくのお腹がきゅーっと痛くなってきた。父に言った。「もうそれくらいにして」しかし父はかまわず糸を出し続けた。バーブローオの手の中で糸巻がくるくるとまわりつづけていた。凧は遠くに行つてついに姿が見えなくなった。

ぼくは凧はもうなくなったとあきらめた。しかし糸はまだピンと伸びた

ままだった。

父は糸をしばらくぼくに握らせた。気がつくとぼくは凧に引っ張られていた。思わず叫んだ。父は凧をゆっくりとおろしはじめた。しばらくすると凧は父の手の中に戻ってきた。父は凧をぼくにくれた。

ぼくは両手で凧をつかんでいた。でもとても両手のなかに凧はおさまりそうもないとそう思った。

凧のおかげでぼくらはおもいきり笑った。笑った。ただ、声をだしてげらげらとではなく、心の中で声を上げて。でも、それはまたなぜだったろう。

父の手紙を読むのを止めてぼくはそのまま呆けたようにすわっていた。あれやこれやと思い出しながら。

祖母が外から帰ってきてたずねた。

「お父さんはなんて書いてきたの」

ぼくは父の手紙を先へと読みはじめた。

父は書いていた。

「一昨日の日曜日、みんなで湖まで遊びに行きました。お母さん、マニー、ビティヤーも行きました。朝早い時間で美しい霧がでていました。樹々は頭から白いシーツを被った森の主のようでした。マニーとビティヤーは歌をうたいました。マニーの歌は、

さあ起きて 小鳥のおばさん
お外はすっかり明るいのに
いつまでおめめをつむっているの

金色の光が
巣の前で踊っているのに
いつまでおめめをつむっているの

湖の岸では小鳥がたくさん飛び交っていました。マニーは私に言いました。

「お父さん、小鳥たちはみんな起きているのに、この歌の小鳥さんは

まだねているのね。じゃなければ、お父さんが言うようにこの小鳥さんは夢の中で飛んでいるのね」

ビティヤーも言葉にならない歌をうたっていました。

「ヤー、イー、ヤー、イー、ヤー」

お母さんはお弁当に御馳走をたくさん作って持ってきていました。みんなでお腹いっぱい食べました。夕方になって家に帰りました。おまえのことを思い出していました。マニーはおまえのためにちっちゃくて丸いガラスのおはじきのように平べったい小石を拾ってきました。

小石のようなちいさなお家^{うち}

きれいなきれいな小石さん

の詩^{うた}にあるような。

帰り道ではみんなぐっすり眠りました。私を除いて。おまえがいたならきっとおまえは私と一緒に起きていたでしょう。次から次へと質問をしつづけていたでしょう。

本を読むこと、机にすわって書き物をする事、あちこち遊びに行くこと、これにかけては父は誰にも負けなかった。父が本を読み始めるときどき面白いことがあった。顔の前に本を広げて家のどこであれ腰をおろすともう他のことはなにもかも忘れてしまった。どこか遠くに行ってしまったかのように。あのときの凧のように。ぼくは父の前に立って言ったものだ。

「お父さん、お茶は？」

「そこの戸棚の中にあるよ・・・」というのが父のいつもの返事だった。

「お父さん、沐浴は？」

「そこに置いといてくれないか・・・」

すると母が台所から声をかける。

「何を言ってるんですか、朝起きてすぐに沐浴したじゃありませんか」

「帰りがけに買ってくるよ」というのが父の返事。

ぼくはアコールカルさんのように笑いすぎてころびそうになる。母は台所で笑っている。

マニーがやって来て言う。

「お父さん、お茶のカップがあいたらちょうだい。お母さんがもってきてって」

父は机の上を手探りする。一時間でもそうしている。そこにはカップも皿もない。母は台所でお茶をいれている。

すると父は突然目が覚めたようになる。

「ドゥルガー、こりゃいったいどうしたんだろう」

「お父さん、どうしたの」マニーが側に行ってたずねる。

「いったいぼくは何を探していたのだろうね」

「お父さんたら右手で本を探していたんでしょう。でも本は左手に持っているんじゃないの」マニーは言う。

「おや、そのとおりで」

ぼくらはみんな笑ってしまう。固まったようになった父はぼくらを見てたずねる。

「そんなに何がおかしいんだね。だれかピエロでもきたみたいじゃないか」

「ええ、まあそんなところですよ」母がそういうころには父はまた読書に没頭している。

父の読書を本当の読書というのだ。一度眠りにつくと9ヶ月間は目を覚ますことがないという伝説のクンバカルナの熟睡よりも「ストロング」だとアコールカルさんはよく言っていた。まさにそのとおりだ。

母はよく父のことをブカースラ（ブックアスラ「本の鬼」の意の作者の造語—訳注）だと言っていた。本物の鬼のバカースラは車に積んだ食べ物をべろりと平らげたそうだけど、このブカースラは本棚にいっぱいの本を読みあさるのだ。本当にそうだ。あるとき母はブカースラと言いながら父の鼻を指でつまんだことがあった。しかし父には何の効き目もなかった。父は言った。

「これ、やめないか。子供たちが見てるじゃないか。お父さんの鼻をお母さんがだっこしてるって」

ぼくは笑った。すると母が言った。

「笑うんじゃないありません。あなたも本を読みながら鼻の穴をふくらませるようになってますよこのごろ。お父さんが本を読むとどうなるかあなたよく知っているでしょう。一冊本を読むとそれがそのまま頭の中に残るのよ。必要な時にはそれがまた外へ。だから頭がなんてまた大きくなったことでしょう」

というのが実際父の読書だった。

ものを書き出すとそれも同じ。声をかけようと、手を叩こうと、何をやっても父には何も聞こえない。

あちこち遊びに行くについても父にかなう人はいなかった。どこにでも行く。山に登る。階段があれば井戸の中にも降りていく。公園には自転車で行く。ピクニックには馬車で行く。バスでも行く。手段は何でもあり。

一昨日のピクニックにはみんなで馬車で行った。ダーナイー女神様のお寺にお参りに。とても古いお寺。人間がまだ森で暮らしていた頃の昔のお寺に。

父と母はのんびりと後ろの席に腰をおろしていた。ぼく、マニーそしてビティヤーは前の座席に御者の隣にすわった。いつものようにビティヤーは家の使用人のカーシャーバーの膝に乗っている。片足を下に伸ばして足元の馬車の鐘を鳴らしはじめるともう止まらない。鐘を鳴らすと馬が早く走るとそう思っているようだ。

道の両側には深い森があった。

しばらくすると舗装をしていない道から馬車はいきなり樹々の間に入り込む。大きな傘の下にはいったような気がする。かなり行った後にくねくねとさらに道を曲がってとつぜん馬車が止まる。目の前に岩が山のように積み上がった場所がある。

「こんなにたくさん石、だれがここに集めたの」マニーがぼくも聞きたいと思っていた質問をした。

「これがダーナイー女神様のお寺だよ」父が言った。

それは岩山ではなかったが山のように見える石の寺院だった。ところどころ岩の隙間から樹が生えていた。樹の根が大きな岩を抱え込んでいた。

その岩山には入り口があった。中に入ると大きな石柱があった。足元の床には石が敷かれていた。天井はでこぼこだった。あちこちから岩の天井を突き抜けてぶらさがっている樹の根が見えた。

寺の奥に部屋があった。ごつごつしたそこも石の部屋だった。暗く静かで空気はひんやりしていた。部屋の突き当たりに血塗られたように赤い大きな楕円形の岩があった。岩の上部のかっと見開いた^{くろしろ}黒白二つの目がこちらをにらみつけている。

ぼくは父の手をぎゅつとにぎった。母が父のもう片方の手をにぎった。マニーはぼくの手をつかんだ。誰も話をするものはいなかった。しかし小さな大将だけが大声を出して騒いでいた。ぼくたちをこわがらせていたのはビティヤーだった。

「これがダーナイー女神様だ。森に住む人間たちの神様。原始の女神。昔はここにもっと深い森があった。トラヤヒョウの^{すみか}住処だった」

父が次に何かを言う前に、ぼくらはみんなそこを飛び出して馬車が止めてあったところまで走って行った。母は子供のころ徒競走で賞をもらったことがあった。そのうちのいくつかは祖父の家の戸棚の中に置いてある。どうして母がそんなに賞をもらえたのか、そのとき初めてぼくは納得した。

馬車の近くでカーシャーバーがコホンコホンと咳をしながら^{ビティヤー}安葉巻を吸っていた。彼が言った。

「ダーナイー様は宝を恵んでくださる女神様じゃ。森に住む人間どもは自分のおっかさんだと思ってみんな米をお供えに来ますじゃ」

母の後に続いてぼくらはもう一度寺内にはいった。

父は暗い奥の院で女神の岩の前に一人で立っていた。この世界の中でただ一人の人間であるかのように。何を考えていたのだろう。父の大きな頭の中で本が開いたり閉じたりしているのだろうか。パラパラとページをめくるように。

母は父の手を取ってたずねた。

「何かが見えますか。何を考えていますの？」

「人間に必要なものすべてを与您てくださる原初の力・・・」

父は何を言おうとしているのだろう。聞いているうちにぼくは足が痛くなってきた。足元の冷たい床にしゃがみこんだ。するとマニーもしゃがんだ。それから父と母も。蓮の花がつぼんだようになった。

「寺の外から中の奥の院を見たときにその原初の力が見えた。昔の森の人間たちにも見えたはずだ。暗い奥から外を見ればその力から生まれた人間たちを見ることもできる。今でも。どんなに変わったように見えても、人間を惹きつけるこの昔の力は変わらない」

父はそんなことを何か話しつづけていた。

ぼくとマニーは立ち上がった。ぼくは寺の壁に手を触れた。壁は冷たかった。手を壁につけたまま壁沿いに歩いた。岩肌はごつごつしていた。尖った石の先が手に刺さるようだった。それがとても気持ちよかった。

歩いている内に入り口まで来た。

外のすべてが溢れんばかりの^{ひかり}陽光の中で乾ききっていた。すぐ先には深い緑の森。目の前にびっしりと樹が茂っていた。樹々の間に見える道が寺の入り口まで続いている。ぼくとマニーはちょうどその境にいた。

振り返って寺をのぞくと光は奥に向かうほど^{かす}微かになりついには濃い暗闇の中に吸い込まれていた。しかし女神のあの両目ははっきりと見えた。血の色をした岩の足元に父と母はしゃがんでいた。ビティヤーは母の膝で静かに眠っていた。

寺の奥から父の声だけが聞こえていた。それだけが。岩の寺よりはるか以前の太古の昔に聞いた覚えがある懐かしい声のように。

ぼくと父は大昔から互いのことを知っていたのだろうか。でもまさかそんなことが。

頭の中が混乱しかけてきたそのときに、ぼくとマニーはそっと寺の外に出た。外の小さな樹に何かの実がたくさん成っていた。その実を拾い集めているうちに、やがてそんなことをすっかり忘れてしまった。

父の手紙を読みながらいろいろなことを思い出していた。それらはすべてぼくの目の前で本当にあったことなのだ。ぼくが何をしているときも、

『アダム』

父はいつもそこにいた。独楽をまわして遊んだときも、凧を揚げたときも、本を読んだり、寺に行ったときも。仮にそれを別にするにしても、ぼくの頭の中に何か考えが浮かぶとき、頭の片隅に必ず父がいた。きっとぼくははるかな昔にどこかで父と出会ったのだ、そしてそれ以来二人はずっと一緒にいたのだ。

父は手紙の最後にこう書いていた。

「おまえは私たちとずいぶん離れた所で暮らしているけれど、いつもみんなの心の中にいます。私たちもおまえの心の中にいるとそう信じています。なるべく早く手紙を書きなさい」

父の手紙を読み終えてうれしくて、すぐに祖父からきれいな紙をもらってくると、父に宛てて長い返事を書いた。たっぷり2枚は書いただろう。

手紙を封筒に入れる前にもう一度読み直そうとして、ぼくは驚いた。

手紙のはじめに「親愛なるお父様へ」と、そう書いたはずなのに。どういうことか、ぼくは書いていた「親愛なるアダム様へ」と。

【解題】

ここで翻訳した作品はマラーティー語の短編小説で、原題は आदम (Ādam)、発表年は不明。作者 प्रकाश नारायण संत (Prakash Narayan Sant, 1937~2003) は、自身の家族の思い出を思春期を迎えようとする少年の目を通して綴った一連の半自伝的作品で人気を博したマラーティー語作家。

本作品では、作者が二十歳のときに亡くなった父親の思い出を中心に、家族との暖かい交流の様子が穏やかな筆致で描かれている。また、ここで触れられている父との結びつきの想念は母性に対する父性の想念として見れば、あるいはインドに特有の印影を帯びているものかもしれない。

出典は、मराठी कथा विसावे शतक, सं. के. ज. पुरोहित, सुधा जोशी, मॅजेस्टिक प्रकाशन, 2004, मुंबई.